

2023

東京芸術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre



PHILHARMONIE DE PARIS
ORCHESTRE
DE PARIS

東京芸術劇場 × フィルハーモニー・ド・パリ
パリ管弦楽団メンバーによる特別アカデミー レポート

Tokyo Metropolitan Theatre

×

Philharmonie de Paris

Special Academy

by musicians of Orchestre de Paris

Report

CONTENTS

目次 | Table des matières

02	挨拶
03	事業概要
04	講師・スケジュール
05	レッスン・プログラム
07	成果発表会プログラム
08	フィルハーモニー・ド・パリ - パリ管弦楽団
09	講師プロフィール
11	芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド (GOA)
12	現場レポート — 池田卓夫 (音楽ジャーナリスト)
19	フォトギャラリー
20	アカデミー生レポート — 和田桃子、大和田璃奈、井上優佳、亀岡航紀
26	講師からのフィードバック
29	パリ管弦楽団担当者 レポート — ラシェル・デール
31	東京芸術劇場担当者 レポート — 山下直弥、三浦幸恵

MESSAGE

ごあいさつ

東京芸術劇場は、東京の北東部の JR 池袋駅近くにある、大中小4つのホールと展示ギャラリー、リハーサルルーム、会議室を備えた、東京を代表する複合文化施設です。

「創造発信」「賑わいの創出」「人材育成」「教育普及」という4つの使命のもと、海外連携を視野にいれた事業展開をおこなっています。東京都と友好都市提携40周年を迎えたパリ市にある文化拠点フィルハーモニー・ド・パリとは、数年前より有機的な連携を模索して参りました。そして、念願の特別アカデミーというエデュケーション事業で連携をスタートさせることが出来たことを、心より嬉しく思います。

パリ管弦楽団を代表する奏者たちによる GOA 生へのレッスンは、たった4日間ではあったものの、オーケストラ・スタディも取り入れてくださり、実に濃密で、刺激に満ちた、実りのある時間となりました。

この経験は未来に繋がる大切な場であったと同時に、GOA 生及び我々は、必ずこの学びを生かして次に進む覚悟を持たないとはいけません。そして、日仏のエデュケーション担当者の交流は、共に音楽を介して社会との繋がりを模索する劇場スタッフにとって、非常に有意義で貴重なものとなりました。4人の講師の皆様、献身的なレッスンを本当にありがとうございました。

また、特別アカデミーを実現するにあたり、快くお引き受けいただきましたパリ管弦楽団の Anne-Sophie Brandalise 氏、準備の段階から多大なお力添えをいただきましたエデュケーション担当の Rachel Dale 氏、そしてレッスン時の通訳の皆様に、あらためてこの場を借りて感謝を申し上げます。

今後も双方にとって価値のある国際的な連携プロジェクトが継続されますよう、心から願っております。

東京芸術劇場コンサートホール ジェネラルマネージャー 大島千枝

パリ管弦楽団は2022年秋に日本ツアーを行いました。そのわずか1年後に芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド (GOA) の講師として招聘されたことは、私たちにとってこの上ない喜びでした。特別アカデミーを指導するために、4人の音楽家（フルート、オーボエ、トランペット、トロンボーン）が東京を訪れました。

オーケストラやアンサンブル演奏をめぐるトップレベルの知識やノウハウを次世代に伝えることは、パリ管弦楽団にとって極めて重要な使命です。パリ管弦楽団は長年にわたるアカデミー活動で延べ200人以上の若い音楽家たちを指導しており、2022年にはクラウス・マケラ（パリ管弦楽団 音楽監督）のもとで新しい形式のアカデミーを発足させました。

パリ管弦楽団は「パリの音楽大使」として、演奏旅行や演目作りを通じて世界各地のオーケストラやホールと国際的な関係を築くことを目指してきました。「フランス音楽の解釈を伝える」ことを目指した今回の特別アカデミーは、パリ管弦楽団のこうした国際的使命に、前述の教育的使命

を融合する機会となりました。このプロジェクトは、音楽と文化に国境はないということをタイムリーに（訳注：ロシア・ウクライナ戦争やイスラエル・パレスチナ紛争の激化を背景に）思い起こさせました。

パリ管弦楽団の音楽家たちが、GOAの熱心な若い音楽家たちにインスピレーションを与えたことを確信しています。芸劇アカデミーは、私たちのアカデミーと同様プロの音楽家たちによって設立されたアカデミーです。深く広い交響楽の伝統を引き継ぐ未来のオーケストラを育てるという目的を共有する、非常に明確なプロジェクトなのです。

パリ管弦楽団にとって、教育プロジェクトを国際的な射程で実施することは長年にわたる願いでした。パリ管弦楽団／フィルハーモニー・ド・パリ、そして芸劇アカデミー／東京芸術劇場の両者にとって初めての試みでしたが、運営チーム、GOAのメンバー、講師を務めた音楽家たち、そして東京都の真摯な参画に感謝の意を表して締め括りたいと思います。今後も、こうした創造的で国際的な教育事業がコラボレーションを通じて行われることを願っています。

パリ管弦楽団 芸術主幹
アンネ＝ソフィー・ブランダリーズ Anne-Sophie Brandalise

SUMMARY

事業概要 | Sommaire

東京芸術劇場は、劇場のミッションの一つに、東京都の音楽・舞台芸術を代表する「顔」として、「国際文化交流」の拠点となるべく、海外劇場との連携や海外発信を掲げてきました。その一環として、フランス・パリに位置する劇場、フィルハーモニー・ド・パリと提携し、パリ管弦楽団メンバーによる若手音楽家のための特別アカデミーを開催いたしました。

フィルハーモニー・ド・パリの首席レジデントであるパリ管弦楽団は、教育普及事業として、若者や青少年に向けた文化活動、アカデミー事業やキッズオーケストラ・プロジェクト『DEMOS』などのトランスミッション（＝継承、伝達）を軸とした活動、社会包摂に関する活動を展開しています。2022年には世界中の若手音楽家を対象とした「サマーアカデミー」と「スタジオアカデミー」をスタートさせ、国際的な視野で若手音楽家の育成に努めています。

東京芸術劇場は、若手管打楽器奏者の育成事業を2014年よりスタートさせ、2021年からは正式名称を「芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド（通称：GOA）」に改称して展開し、これまで多くの優秀な若手音楽家を輩出しています。新進の管打楽器奏者を対象に、「演奏家から〈音楽家〉へ」をスローガンに、レッスンとキャリアアップゼミ、コンサートを軸とした3年間のカリキュラムを実施。ホルン奏者・福川伸陽氏をミュージック・アドバイザーに迎え、オーケストラや吹奏楽だけに限らない幅広い表現力と、音楽家としてのセルフプロデュース能力の双方の向上を目指し、学びと実践の場を提供しています。

特別アカデミーは、演奏家として重要な個人レッスン、オーケストラ・スタディ、室内楽レッスンに加え、アカデミー生がレッスンの内容を決定することができるフリーレッスンを3日間実施し、最終日には成果発表会を行い、日仏音楽家による濃厚な4日間となりました。

TUTORS & SCHEDULE

講師・スケジュール | Professeurs & Calendrier

講師

ヴァンサン・リュカ
Vincent LUCAS

パリ管弦楽団 首席フルート奏者
Principal flute of the Orchestre
de Paris

レミ・グルイエ
Rémi GROUILLER

パリ管弦楽団 オーボエ奏者
Oboe of the Orchestra de Paris

セレストアン・ゲラン
Célestin GUERIN

パリ管弦楽団 首席トランペット奏者
Principal trumpet of the Orchestre
de Paris

ジョナタン・レイス
Jonathan REITH

パリ管弦楽団 首席トロンボーン奏者
Principal trombone of the
Orchestre de Paris

通訳：小松晋一郎、モリス真登、橋本晋哉

スケジュール

実施場所 | 東京芸術劇場 地下2階リハーサルルーム
7階コンサートホール

第1日目 11月6日(月)

10:30-10:50 全体グリーティング
11:00-13:30 個人/オーボエ | 個人/フルート
室内楽/金管五重奏
16:00-19:00 個人/トロンボーン | 個人/トランペット
オーケストラ・スタディ/木管+ホルン

第2日目 11月7日(火)

10:00-13:00 個人/オーボエ
室内楽/木管五重奏 [A]
室内楽/金管五重奏
15:00-18:00 個人/トロンボーン
室内楽/木管五重奏 [B]
フリー/ヴァンサン・リュカ
フリー/セレストアン・ゲラン

第3日目 11月8日(水)

10:00-13:00 個人/トランペット
室内楽/木管五重奏 [A]
室内楽/木管五重奏 [B]
オーケストラ・スタディ/ローブラス
14:30-16:00 フリー/ジョナタン・レイス
14:30-15:30 個人/トランペット
15:00-18:00 個人/フルート
15:30-18:00 オーケストラ・スタディ/トランペット
17:00-18:30 フリー/レミ・グルイエ

第4日目 11月9日(木)

10:30-12:30 リハーサル (全出演者、グループ)
15:00-17:30 成果発表会/クロージング

LESSON PROGRAM

レッスン・プログラム | Programme de cours

1 個人レッスン

●フルート

講師 ヴァンサン・リュカ
受講生 和田桃子（フルート／8期）
野口美夢（フルート／9期）
指導曲 モーツァルト／
フルート協奏曲 第2番ニ長調 K. 314
オーケストラ・スタディ

●オーボエ

講師 レミ・グルイエ
受講生 大和田璃奈（オーボエ／8期）
村松和奈（オーボエ／9期）
指導曲 モーツァルト／
オーボエ協奏曲 ハ長調 K. 314
オーケストラ・スタディ

●トランペット

講師 セレスタン・ゲラン
受講生 井上優佳（トランペット／8期）
中山京（トランペット／9期）
守屋紗弥（トランペット／9期）
指導曲 基礎練習
トマジ／トランペット協奏曲
ジョリヴェ／コンチェルティーノ

●トロンボーン

講師 ジョナタン・レイス
受講生 代田将也（トロンボーン／8期）
亀岡航紀（トロンボーン／9期）
指導曲 基礎練習
ダヴィット／
コンチェルティーノ 変ホ長調 op. 4
ボザ／トロンボーンとピアノのためのバラード
ロパルツ／演奏会用小品 変ホ短調
オーケストラ・スタディ

2 室内楽レッスン

●木管五重奏 [A]

講師 ヴァンサン・リュカ
受講生 和田桃子（フルート／8期）、大和田璃奈（オーボエ／8期）、近野千昌（クラリネット／卒団生）、加地佑唯（ファゴット／10期）、大塚季（ホルン／10期）
指導曲 イベール／木管五重奏のための3つの小品
タファネル／
木管五重奏曲 ト短調より 第1楽章
ラヴェル（M. ジョンソン編曲）／
組曲「クーブランの墓」

●木管五重奏 [B]

講師 レミ・グルイエ
受講生 野口美夢（フルート／9期）、村松和奈（オーボエ／9期）、栗山かなえ（クラリネット／10期）、橋本悠平（ファゴット／賛助）、千田敦也（ホルン／賛助）
指導曲 タファネル／
木管五重奏曲 ト短調より 第1楽章
ダンツィ／木管五重奏曲 変ロ長調 op. 56-1
ミヨー／組曲「ルネ王の暖炉」

●金管五重奏

講師 セレスタン・ゲラン、ジョナタン・レイス
受講生 井上優佳（トランペット／8期）、守屋紗弥（トランペット／9期）、千田敦也（ホルン／賛助）、亀岡航紀（トロンボーン／9期）、山田悠貴（チューバ／10期）
指導曲 エワルド／金管五重奏曲 第1番
ドビュッシー（G. クレシャ編曲）／
罍麻色の髪の乙女
ラフォス／即興組曲

3 オーケストラ・スタディ

●木管+ホルン

- 講師 ヴァンサン・リュカ、レミ・グルイエ
編成 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、
ファゴット2、ホルン3、アルト・サクソフォーン1
受講生 和田桃子（フルート／8期）、野口美夢（フルート／9期）、大和田璃奈（オーボエ／8期）、
村松和奈（オーボエ／9期）、栗山かなえ（クラリネット／10期）、吉川清香（クラリネット／卒団生）、
加地佑唯（ファゴット／10期）、金子歩未（ファゴット／卒団生）、大塚季（ホルン／10期）、
古川優貴（ホルン／10期）、佐藤文香（ホルン／卒団生）、海老原美保（サクソフォーン／8期）
指導曲 チャイコフスキー／交響曲 第4番 ヘ短調
ベートーヴェン／交響曲 第3番 変ホ長調
「英雄」より 第3楽章
ムソルグスキー（ラヴェル編曲）／
組曲「展覧会の絵」より 古城、テュイルリーの庭、プロムナード（練習番号46から）、
卵の殻をつけたひな鳥の踊り

●トランペット

- 講師 セレスタン・ゲラン
編成 トランペット3
受講生 井上優佳（トランペット／8期）、中山京（トランペット／9期）、守屋紗弥（トランペット／9期）
指導曲 バルトーク／管弦楽のための協奏曲
マーラー／交響曲 第2番 ハ短調「復活」より
第4楽章「原光」
ムソルグスキー（ラヴェル編曲）／
組曲「展覧会の絵」より プロムナード（冒頭）
ラヴェル／ラ・ヴァルス

●ローブラス

- 講師 ジョナタン・レイス
編成 トロンボーン3、チューバ1
受講生 代田将也（トロンボーン／8期）、亀岡航紀（トロンボーン／9期）、山田悠貴（チューバ／10期）
指導曲 ブラームス／
交響曲 第2番 二長調より 第4楽章
ブラームス／
交響曲 第4番 ホ短調より 第4楽章

- ブルックナー／
交響曲 第8番 ハ短調より 第4楽章
ベルリオーズ／
幻想交響曲より
第4楽章「断頭台への行進」
第5楽章「サバトの夜の夢」
マーラー／
交響曲 第2番 ハ短調「復活」より 第5楽章
モーツァルト／オペラ「魔笛」より
合唱付きアリア「おおいシスとオシリスの神よ」
ワーグナー／楽劇「ローエングリン」

4 フリー・レッスン

●ヴァンサン・リュカ

- 講師 ヴァンサン・リュカ
受講生 (1) 和田桃子（フルート／8期）
(2) 宮楠菜穂（サクソフォーン／8期）
指導曲 (1) 基礎練習、オーケストラ・スタディ
(2) ボザ／12の練習奇想曲より 第6番

●レミ・グルイエ

- 講師 レミ・グルイエ
受講生 加地佑唯（ファゴット／10期）
指導曲 シューマン／幻想小曲集 op. 73

●セレスタン・ゲラン

- 講師 セレスタン・ゲラン
受講生 (1) 守屋紗弥（トランペット／9期）、大塚季（ホルン／10期）、亀岡航紀（トロンボーン／9期）
(2) 代田将也（トロンボーン／8期）
指導曲 (1) プーランク／トランペット、ホルン、トロンボーンのための三重奏曲
(2) オーケストラ・スタディ

●ジョナタン・レイス

- 講師 ジョナタン・レイス
受講生 亀岡航紀（トロンボーン／9期）
指導曲 オーケストラ・スタディ

CONCERT FINAL

成果発表会プログラム

1. 講師演奏

ヴァンサン・リュカ（フルート）
ドビュッシー／シランクス
ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲

2. 成果発表

木管五重奏 [A]
ラヴェル／組曲「クーブランの墓」より プレリユード、メヌエット、リゴードン
タファネル／木管五重奏曲 ト短調より 第1楽章
イベール／木管五重奏のための3つの小品

3. 講師演奏

レミ・グルイエ（オーボエ）
ボザ／田園幻想曲

4. 成果発表

木管五重奏 [B]
ミヨー／組曲「ルネ王の暖炉」
ダンツィ／木管五重奏曲 変ロ長調 op. 56-1

————— 休憩 —————

5. 講師演奏

セレスタン・グラン（トランペット）
オネゲル／イントラダ

6. 講師演奏

ジョナタン・レイス（トロンボーン）
ウェーバー／ロマンス

————— 休憩 —————

7. 成果発表

金管五重奏
エワルド／金管五重奏曲 第1番

（講師ピアノ伴奏：岡本和也）



フィルハーモニー・ド・パリ - パリ管弦楽団

Philharmonie de Paris – Orchestre de Paris



©Marco Borggreve

パリ管弦楽団は、1828年に設立されたコンセルヴァトワール・コンサート協会の後継団体であり、1967年11月14日にシャルル・ミュンシュの指揮のもと創立コンサートを開催した。ミュンシュの後任として、ヘルベルト・フォン・カラヤン、サー・ゲオルク・ショルティ、ダニエル・バレンボイム、セミヨン・ビシュコフ、クリストフ・フォン・ドホナーニ、クリストフ・エッシェンバッハ、パーヴォ・ヤルヴィ、そして近年ではダニエル・ハーディングが音楽監督を務めた。2021年1月から、クラウス・マケラがパリ管弦楽団の第10代音楽監督として6年間の任期を務めている。

半世紀の歴史の中で幾度もの移転を経て、2015年1月にオープンしたフィルハーモニー・ド・パリの首席レジデントとなった。建築家ジャン・ヌーヴェルによって設計されたこの施設は、フランスの伝統と色彩を継承するのに理想的な場所にある。2019年1月、パリ管弦楽団は、フィルハーモニー・ド・パリの芸術プロジェクトの中核に位置する特定の部門として、世界でも類を見ないこの文化的ハブの不可欠な一部となることで、その豊かな歴史における新たなステージに踏み出した。

フランスを代表する交響楽団であるパリ管弦楽団は、119人の音楽家を擁し、毎シーズン、フィルハーモニー・ド・パリまたは海外ツアーで約100回の

コンサートを開催している。

パリ管弦楽団の戦略は、その活動をフランス音楽の伝統の直系に位置づけるものであり、そのため、レジデント・コンポーザーの招聘、多数の初演、20世紀の指導的作曲家（メシアン、デュティユー、ブーレーズなど）に捧げる作品集の上演などを通じて、19世紀と20世紀のレパートリーと現代の創作の両方を橋渡しする重要な役割を果たしている。

フィルハーモニー・ド・パリは、パリ管弦楽団をその芸術的・教育的施設の中心に位置することで、これまで以上に青少年のための活動を最優先課題としている。フィルハーモニー・ド・パリの様々なスペースで、あるいはパリ市内や郊外など、フィルハーモニー・ド・パリから離れた場所でも、小学生や家族連れ、さらに音楽生活から遠ざかっている市民や社会的弱者にも開かれた幅広い活動を提供している。
orchestredeparis.com



講師プロフィール



ヴァンサン・リュカ Vincent LUCAS

パリ管弦楽団 首席フルート奏者
Principal flute of the Orchestre de Paris

トゥールーズ・キャピトル管を経て、ベルリン・フィル（クラウディオ・アバド）のソロピッコロ／フルート奏者を6年間務めた。オーケストラ奏者だけでなく、国際的なソリストとしても活躍している。

教育者としても著名で、世界各地でマスタークラスを開催している。1995年パリ国立高等音楽院でアラン・マリオンのアシスタントを務めた後、ソフィー・シェリエのアシスタントに就任。1999年にはパリ地方音楽院の上級教授、桐朋学園大学名誉教授、サンクトペテルブ

ルク音楽院名誉教授に就任した。室内楽では、クリストフ・エッセンバッハ、マリー＝ピエール・ラングラメ、ローラン・ワグシャル、パリ管弦楽団のソリストたちなど、著名な音楽家たちと共演している。2010年からはレーベル『indesens』と積極的にレコーディング活動を行い、彼が参加したデュティユー、サン＝サーンス、ドビュッシー、ゴーベル、プーランク、ジェフティックにフィーチャーした6つCDが数々の賞を受賞している。近年では、CD「ヴィヴァルディ：6つのフルート協奏曲 Op.X」（2019年）などをリリースしている。使用楽器は日本製ムラマツ。



レミ・グルイエ Rémi GROUILLER

パリ管弦楽団 オーボエ奏者
Oboe of the Orchestre de Paris

南フランスのアヴェロン国立音楽院でナタリー・ルブラジデックに師事し、オーボエを始める。17歳でパリに移り、ミシェル・ジブローとダニエル・アリニョンに師事した後、パリ国立高等音楽院のダヴィッド・ワルターのクラスに入った。在学中の2008年には、ジャック・ティスとフレデリック・タルディにも師事し、室内楽（木管五重奏）をミシェル・モラガスに師事した。

2013年にローレア・デュ・コンセルヴァトワール管 首席オーボエ奏者、2014年にリモージュ・オペラ座 首席イングリッシュホルン奏者を経て、2015年にパリ管弦楽団 オーボエ、イングリッシュホルン、ヘッケルフォン奏者となる。同年、ヴェルビエ音楽祭室内管のメンバーとなり、2015年以降はロンドン響、マーラー室内管、オスロ・フィルなどヨーロッパの主要オーケストラと共演するほか、木管五重奏団“Neodyme”でも活動している。

2015年よりパリ国立高等音楽院（Conservatoire à Rayonnement Régional de Paris）でも指導を行っている。



セレスタン・ゲラン Célestin GUERIN

パリ管弦楽団 首席トランペット奏者

Principal trumpet of the Orchestre de Paris

5歳の時にトランペットを始める。フランス放送フィルのイバイム・マアルフ、ジェラルド・ブーランジェに師事した。その後、パリ国立高等音楽院に入学し、パリ管奏者のクレモン・ガレック、ピエール・ジレに師事した。パリ音楽院の両教授の下でオーケストラ・レパートリーの研鑽を積み、パリ国立歌劇場管、パリ管、フランス国立フィル、パリ室内管と共演。

エラスムス（ヨーロッパの留学制度）の留学生としてドイツのラインホルト・フリードリヒに師事し協奏曲のレパートリーに磨きをかける。2016年には満場一致で修士号を取得し、ヴァレリー・ゲルギエフが指揮するヴェルビエ音楽祭管のメンバーとなる。2017年秋、ルーアンで開催された第1回エリック・オビエ国際コンクールに優勝。数週間後、国立メス管の首席奏者に任命される。翌年、ARD ミュンヘン国際音楽コンクール2位を受賞、同時にBRクラシック賞を受賞した。2019年よりパリ管首席ソロトランペット奏者。



ジョナタン・レイス Jonathan REITH

パリ管弦楽団 首席トロンボーン奏者

Principal trombone of the Orchestre de Paris

パリ管首席トロンボーン奏者であり、同世代で最も才能あるトロンボーン奏者の一人である。2015年、権威のあるARD ミュンヘン国際音楽コンクールで2位を獲得した。

1988年生まれ。故郷のエクサンプロヴァンスでトロンボーンを始めた後、リヨン国立音楽院でミシェル・ベッケに師事。2010年に最優秀の成績で卒業。その後、フランス国立管弦楽団に首席トロンボーン奏者として入団し、2014年まで務めた。

フランス国内外で定期的にマスタークラスを開催しているほか、ヴェルビエ音楽祭ジュニア・オーケストラやワン・コリア・ユース・オーケストラなどの青少年オーケストラを指導している。

室内楽にも積極的で、2015年からパリ金管五重奏団のメンバーである。

ヴェルビエ音楽祭室内管、アンサンブル・レ・ディソナンス、アンサンブル・アンテルコンタンポラン、レ・シエクル、パリ国立オペラ座管、エストニア祝祭管、ソウル・フィルなどに定期的に客演している。プラハの春音楽祭国際コンクールの受賞者でもある。

芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド (GOA)

GEIGEKI Orchestra Academy for Wind

2014年、芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー (WOA) として開講。新進の管打楽器奏者を対象として、「演奏家から〈音楽家〉へ」をスローガンに、レッスンとキャリアアップゼミ、コンサートを軸とした3年間のカリキュラムを展開。ホルン奏者・福川伸陽氏をミュージック・アドバイザーに迎え、国内外の第一線で活躍する音楽家を講師陣に招聘。さらに総合的な音楽家として自立するための力を修得するべく、さまざまな専門家を招いたキャリアアップゼミも定期開催。オーケストラや吹奏楽だけに限らない幅広い表現力と、社会のなかで活躍する音楽家としてのセルフプロデュース能力の双方の向上を目指し、学びと実践の場を提供します。

<https://www.geigeki.jp/performance/goa/>

2023年度活動アカデミー生 ※括弧内は入団期

フルート	和田桃子 [8]、野口美夢 [9]
オーボエ	大和田璃奈 [8]、村松和奈 [9]
クラリネット	栗山かなえ [10]
ファゴット	加地佑唯 [10]
サクソフォーン	海老原美保 [8]、田嶋玲奈 [8]、平井千紘 [8]、宮楠菜穂 [8]
ホルン	大塚季 [10]、古川優貴 [10]
トランペット	井上優佳 [8]、中山京 [9]、守屋紗弥 [9]
トロンボーン	代田将也 [8]、亀岡航紀 [9]
チューバ	島圭佑 [8]、山田悠貴 [10]
打楽器・ティンパニ	尾形賢一 [8]、森山拓哉 [8]

ミュージック・アドバイザー

福川伸陽 (ホルン) 東京音楽大学准教授、元 NHK 交響楽団首席奏者

講師

斎藤和志 (フルート) 東京フィルハーモニー交響楽団首席奏者

荒木奏美 (オーボエ) 読売日本交響楽団首席奏者

アレッサンドロ・ベヴェラリ (クラリネット) 東京フィルハーモニー交響楽団首席奏者

長哲也 (ファゴット) 東京都交響楽団首席奏者

田中靖人 (サクソフォーン) 国立音楽大学教授

佐藤友紀 (トランペット) 元東京交響楽団首席奏者

青木昂 (トロンボーン) 読売日本交響楽団首席奏者

次田心平 (チューバ) 読売日本交響楽団

小林沙羅 (ソプラノ)

篠崎史門 (ティンパニ) 神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席奏者

伊藤悠貴 (チェロ)

西久保友広 (打楽器) 読売日本交響楽団

岡田奏 (ピアノ)

現場レポート

パリ管メンバーの特別アカデミー、 「フレンチ・リラックス」体得した 芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインドの 若い日本人奏者たち

池田卓夫（音楽ジャーナリスト）

東京芸術劇場は「芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド（通称 GOA）」の若い管打楽器奏者 21 人をパリ管弦楽団の名手 4 人が指導する「パリ管弦楽団メンバーによる特別アカデミー」をフィルハーモニー・ド・パリ（パリ管の本拠でもある複合文化施設）との連携事業の皮切りとして 2023 年 11 月 6 日から 9 日の 4 日間、東京・池袋の同劇場リハーサルルーム（地下 2 階）で開催した。



講師を務めたのはパリ管首席フルート奏者のヴァンサン・リュカ、オーボエ奏者のレミ・グルイエ、首席トランペット奏者のセレスタン・ゲラン、首席トロンボーン奏者のジョナタン・レイスの 4 人。パリ管とフィルハーモニー・ド・パリの教育・アウトリーチマネージャー、レイチェル・デールが芸劇との交渉を取りまとめ、日本にも同行した。

指導は 1) 個人レッスン、2) 室内楽レッスン、3) オーケストラ・スタディ、4) フリー・レッスンの 4 本立て。最終日、9 日の午後 3 時から成果発表会を行なった。筆者は初日から個々のレッスンに立ち会い、講師や受講者の話も聞きながら、発表会までの密着取材を担当。たった 4 日間で「ドイツ流の規律や組織が基本の日本人奏者が、フランス流のよりリラックスしたスタイルを身につける」（リュカ）という「魔法」の現場に遭遇することができた。

最初の 2 日間

11 月 6 日

室内楽 / 金管五重奏①……ゲラン（トランペット）が先ずワンフレーズ吹き、ウォーミングアップ法を教える。「最初の音から『探さない』できちんと吹く。朝の目覚め時は中音域を出しながら、唇の感覚を知覚する。低音を押し付け過ぎず、高音の美しさを保つ…」と、極めて



具体的かつ厳しい。次いでレイス（トロンボーン）がレガート（連続する2つの音を途切れず滑らかに続ける）の練習に入る。「力を加えないで肉体に収めて」と言い、ニュアンスやアーティキュレーション、スタッカートなどの違いを丁寧に説明しながら、フレーズの音量を整えていく。さらに2人で「今度は和音の練習」。長和音、単和音、減和音…と進むと、次は半音上げたり、楽器ごとに主和音と従和音を割り振ったりしながら「音程は上下だけでなく、音量のバランスでもある。呼吸もしっかり！」などと、指示を出す。エwaldの《金管五重奏曲第1番》を教材に、いよいよ合奏の指導が始まる。「縦の線はすごく合っているけど、音楽は横の方向に進む。お互い、よく聴いてみて！」（レイス）、「フレーズを長くとることにより、解釈の筋が一本通る。フレーズは常に後ろから前へと引っ張るように」（ゲラン）、「フォルテはいきなりではなく、クレッシェンドの先にある」（レイス）などなど、矢継ぎ早に指示が飛ぶ。限られた時間にもかかわらず、音楽の表情がどんどん濃くなり、生き物のように動き出す。最後は「すごく良くなったよ」（ゲラン）と、海外の先生たちは褒めるのも上手だ。

個人 / オーボエ……グレイエがベーレンライターの新モーツァルト全集版スコアを携え、大和田璃奈（オーボエ）を相手にモーツァルトの《オーボエ協奏曲》を指導している。「テンポはもっと自由に、もっと横に流れて！でもピアノに遅れず、頂点の音は合わせる」「もっとジョークっぽく、さらにレガートで」と、細かく注文をつける。カデンツァ（独奏楽器だけ、即興の要素を交えた部分）では「もっと自分を理解して、自信を持って、もっと時間をかけて大丈夫だよ」「まわりが静まり自分1人でこなすのは怖いだろうけど、音楽をつくるのは自分。『私はここにいるよ』と存在感を存分に発揮できる箇所がカデンツァだ」など、伸び伸びと演奏できるように心理面のアプローチを重視していた。



個人 / フルート……最年長で団長格のリュカは故郷トゥールーズの国立キャピトル劇場管弦楽団を振り出しにクラウディオ・アバド時代のベルリン・フィルでソロ・ピッコロ/フルート奏者を6年務めた後、パリ管の首席に転じた。桐朋学園大学音楽学部名誉教授に就き、ムラマツフルートなどでのレッスンにも熱心で日本の事情にも詳しい。とりわけ民族色豊かな作品に対しては「私の大好きな楽器、尺八の音色を取り入れ、クリストフ・エッセンバッハ、パーヴォ・ヤルヴィ、クラウド・マケラら、パリ管の歴代指揮者にも評価されてきた」と胸を張る。和田桃子（フルート）にも「ここは尺八から学びなさい」と提案する。「あなたには時間があるのだからセカセカせず、もう少しゆっくりトリルを奏で、アクセントの位置を明確にしてほしい」など、具体的指示も忘れない。



個人/トロンボーン……代田将也（トロンボーン）と亀岡航紀（同）の2人が受講。レイスは合奏のクラスと同じく、ウォーミングアップから教えた。「最初はロングトーン、次はフレキシビリティ、スタンダードなソロ…」といい、「筋肉に負担をかけず、毎回同じポジション、同じ音で始める」。次第に音を上げ、どんどん難易度が増す。「うん、いい柔軟性だ。では次のスケール！」と、厳しい指導に2人が懸命についていく。

個人/トランペット……守屋紗弥（トランペット）とゲランの真剣勝負。「もっとしっかり発音して」「フランスでは同じことを絶対に繰り返さない」「フレーズの“溝”を押さえて」「もっと時間をとり、ゆっくりと話しかけるように」「エネルギーがまだ足りない」「曲想の変化を伝えるには、もう少し長くとる必要があるけど、フレーズの真ん中で息継ぎをしてはいけない」「正確だと音楽が飛ぶ、音楽的だと正確でなくなる。もっと注意して」——とゲランは指導メンバー中の最年少だけに、ビシバシの熱血教師ぶりだ。

オーケストラ・スタディ/木管+ホルン……チャイコフスキーの《交響曲第4番》をリュカ、ムソルグスキー（ラヴェル編曲）の《組曲『展覧会の絵』》をグルイエの指揮で。リュカは「同僚を前に指揮の真似事をするのは初めてだ」と照れる。いざ指導に入ればチューニングの時点から「全員一斉に始めないで」と注文をつけ、オーボエ、クラリネット、ホルン…と細かく音を整えていく。グルイエと2人で音程や音色を厳しくチェックしながら「ドイツ流の縦割りではなく、フランスのオーケストラで一般的な横に流れる音楽」に導き、リズムの柔軟性にも目を光らせる。2人の指示は「ここはダンスなのだから、もっとワルツを意識して」（グルイエ）といった曲想から、「第1オーボエは木管のリーダーとしてもう少し、周囲の音楽にも動きをつけてほしい」などアンサンブルの作り方まで多岐に及び、極めて実践的だ。グルイエは自身で音を出しながら《展覧会の絵》をはじめとする標題音楽の音のイメージのつかみ方を教え、バリ管の「絶えず音色を溶かし合う」持ち味の秘訣も伝えた。「優秀な打楽器奏者ならオーボエ、イングリッシュホルンとの音の融合も常に念頭に置く」といい、たっぷりとしたフレージングが生む拍の柔軟性にも言及。「最初と最後では別のオーケストラを指揮しているようだった」と、褒めることも忘れなかった。《展覧会の絵》でサクソフォンの海老原美保が素晴らしいソロを奏すると、リュカの目が輝いた。「日本で素晴らしいサクソの音楽家を見つけた！パリ音楽院の先生に紹介しなければなりませんね」



11月7日

室内楽 / 金管五重奏②……前日に引き続き、エwaldの《金管五重奏曲 第1番》。トロンボーンのレイス、トランペットのゲランの冷静で厳格な指導の成果か、“パリ管流”が次第に浸透してきているのが、はっきりとわかる。それでも特訓の手綱をゆるめず「軽やかさが足りない」「もっと柔らかく」「リズムの正確さが今ひとつ。全身は必要でも、つんのめってはいけない。アーティキュレーションを大切に」「速度記号よりも曲のキャラクターに目を向けて」「もう少し高貴な雰囲気」「テンポは改善したけど、ブレスのエネルギーが足りず、詰まっているみたいに聴こえる。クラリテ（明瞭さ）がほしい」「音も気持ちも軽くして」「マルカート（はっきりと）をもっと強調する、でも、発音が短くなり過ぎないように」「8分音符の流れを感じ、まるで1人が吹いている感じで」「最初に吹く人と、次に入る楽器の人とで情感を共有して、呼吸もしっかり」「もっと盛り上げる気持ちで一致して」——。指示はどんどん具体的になり、出だしが揃わないと何度でもやり直させる。受講者全員が、必死で食らいついていく。

個人 / オーボエ……村松和奈（オーボエ）がグルイエの個別レッスンを受ける。まずはチャイコフスキー《交響曲第4番》の第2楽章。「もし指揮者がいなかったら、ここはオーボエがリードをとらなければいけない箇所だよ」と自覚を促し「もう少し音にアーチをかけ、アーティキュレーションをしっかりとるように」「そこは少し、不自然だね」と細かく注意を与える。次のブラームス《ヴァイオリン協奏曲》の第2楽章冒頭のオーボエの聴かせどころでも「とにかく音を美しく、自然に」と求めた。

室内楽 / 木管五重奏 [A]……リュカ（フルート）がラヴェルの《組曲『クーブランの墓』》を指導。ある場面でオーボエの音が落ちるとすかさず「もし、今のようなことがコンサートの本番中に起きたら」と切り出した。「ここではフルートがリーダーシップをとり、小節のリズムを皆にわかるよう明確に刻んでください」。さらに「一定の様式に沿ってアクセントを与え、『吹き過ぎず、重くなり過ぎず』を心がけるように」と諭した。



室内楽 / 木管五重奏 [B]……グルイエ（オーボエ）がタファネルの《木管五重奏曲》の第1楽章を微に入り細に入り、解析する。「とてもメロディアスな作品なので、誰が主旋律を担当しているのかを頭に入れ、伴奏それぞれが自分の音色を作っていく」「ファゴットとホルンのメゾフォルテはオーボエのメゾフォルテよりも弱くして！ そうでないとオーボエが聴こえない」。そして、ミヨ一の《組曲『ルネ王の暖炉』》に取り組む。「コルテージとは、何かの目的を伴ってそこに向かうよ



うな行列です。エネルギーに高貴さをこめ、32分音符をもう少し細かく吹くように」「ただ音を出すのではなく、内容を意識して吹く」「歌の時間を理解し、前に誰かが吹いていたのを受けて吹く」「中世音楽の影響を踏まえ、アーティキュレーションは明確に」「ホルンは最も輝かしい楽器。強く吹くと他の木管がマスクされてしまうので、音量をしっかりとコントロールして」「ここは和声的にきちんと書き込まれていないから、個々の楽器がキャラクターをはっきりと踏まえ、それぞれのフレージングを際立たせることで音楽が成立する」。グルイエの分析は詳細で、かなり確かな様式感も持ち主だとわかる。

個人 / トロンボーン……前日に続いてレイスが代田、亀岡をレッスン。1曲通して吹かせては「最初と最後が特にいい」「とても正確だ」と褒める度合いを高めながら時々、「もう少し伴奏に耳を傾ける」「感情を込め過ぎない」といった問題点を指摘していた。



個人 / トランペット……ゲランが前日のピシバシから一転、マウスピースなどの細部にわたり、親身な態度で楽器の相談に乗っていた。守屋が「私は手が小さいので、ピストンを押すのが痛いのです」と打ち明けると、ゲランは「自分も最初は痛かった。色々工夫して慣れ、今は痛くなくなったよ」と優しく励ました。

3日目 11月8日のインタビュー

授業参観を少し離れ、フルートのリュカ、オーボエのグルイエ、トロンボーンのレイスのコメントを取材した。

ヴァンサン・リュカ

17歳でトゥールーズの楽団に入り、来年（2024年）でオーケストラ生活40周年の節目を迎えます。音楽はすべてのエネルギーの源であり、学生であってもモチベーションを失ったら終わりです。1989年に入団したベルリン・フィルはとても厳格な組織で、テンポひとつとっても縦割りでした。1995年以降在籍するパリ管弦楽団はもっとリラックスした雰囲気、フランス流儀を貫きます。今日、多くの学生が指先のテクニックに没頭、極めてデジタルでコンピューターのような音を奏でますが、音楽は感情のサウンドであり、楽譜の内側にある物語を伝えるためのものであることを忘れないでほしい。オーケストラのツアーだけでなく、音大やフルート専門店のマスタークラスで何度も日本を訪れ、感じたのはドイツの強い影響です。それでも私が演奏するフランス音楽に耳を傾け、生徒の何人かはフランスで就職、フランス流儀を問題なくこなします。今回のセミナーでも、そうした違いを



意識、今後の仕事に役立てていただければ幸いです。

レミ・グレイエ

もう3日目ですが、全然疲れを感じません。生徒の演奏は日増しに向上するし、私も彼らのことを良くわかってきました。信頼関係が深まるほど細かな指導もできるわけで、彼らも遠慮せず、もっと自分を出していいと思います。最初はミスを極端に恐れているように見えました。私たちの日常でもありますが、「ミスすることは問題じゃない。今ミスしておく方が大事なのだ」と、声を大にして言いたいですね。願わくは長期のプロジェクトに発展し、定期的に指導したいと思います。



ジョナタン・レイス

今回のように1日だけではない期間が与えられると、生徒の弱点だけでなく強みもわかり、前日指摘した弱点が翌日解消している喜びにも立ち会えます。レミの言う通り、若い人たちの心を開かせ、安心させるには信頼関係の構築が欠かせません。日本の生徒は最初のうち礼儀正しく奥ゆかしかったのですが、時間の経過とともに質問が増え、今日はレッスン時間の3分の1か4分の1が質問に費やされました。僕たちは自由さを教えるために来ているので、質問は大歓迎です。今回、改めて時間かけて上達することの大切さを思いました。



11月9日「成果発表会」

前3日間のアカデミーの成果を問う発表会、講師の妙技も交え、聴衆の前で演奏した。

ドビュッシーの《シランクス》(無伴奏)と《牧神の午後への前奏曲》(ピアノ=岡本和也)はリュカフルート。暗闇から吹き出し、自然に感興を盛り上げる手腕はさすがだ。次はリュカが指導した木管五重奏Aグループ(フルート=和田桃子、オーボエ=大和田璃奈、クラリネット=近野千昌(卒団生)、ファゴット=加地佑唯、ホルン=大塚季)でラヴェル《組曲『クーブランの墓』》抜粋、タファネル《木管五重奏曲》第1楽章、イベール《木管五重奏のための3つの小品》。レッスンの時点で比べ音楽が横に流れ、フレージングも一段と自由になりながら、リズムはきちんと刻む。タファネルでは繊細な情感、色彩感が加わり、それぞれの楽器の果敢な突っ込みも現れる。イベールでは微笑みを交わし合うゆとりが漂い、自由闊達な歌とダンスで魅了した。



次はオーボエのグレイエ率いる木管五重奏Bグループ（フルート＝野口美夢、オーボエ＝村松和奈、クラリネット＝栗山かなえ、ファゴット＝橋本悠平（賛助）、ホルン＝千田敦也（賛助））。先生はボザの《田園幻想曲》を岡本のピアノとともに演奏、激しく歌い上げる部分と囁き流れる歌の箇所との対照が見事だった。生徒チームはミヨウの《組曲『ルネ王の暖炉』》とダンツィの《木管五重奏曲》。ミヨウは出だしこそ「音程が少し悪いか？」と心配したが、フルート、オーボエの積極的なリードで次第に求心力を強めた。終楽章にかけて個々の楽器の語りかけが深まり、最後は完全に溶け合った。ダンツィは5者の凹凸がなくなり、闊達な音の会話の末、最後はかなりのヴィルトゥオージティ（名技性）まで発揮した。



後半はゲラン&レイス担当の金管五重奏（トランペット＝井上優佳、守屋紗弥、ホルン＝千田敦也（賛助）、トロンボーン＝亀岡航紀、チューバ＝山田悠貴）。最初に岡本のピアノでトランペットのゲランがオネゲルの《イントラダ》を肉厚の輝かしい音色、トロンボーンのレイスがウェーバーの《ロマンス》を翳りある味わい深い音色で力強く歌わせ、貫禄を示した。エワルドの《金管五重奏曲第1番》は5人それぞれが小さなミスを恐れずに前へ前へと進み、音色の多彩さ、音量のパワーの両面で長足の進歩を印象づけた。旋律をたっぷりと歌わせ、リズムを立たせ、厚くゴージャス、華麗かつ艶やかな響きで着地点まで走り切り、喝采を浴びた。それは金管五重奏だけではなく受講生、講師の全員に向けて贈られた熱い賞賛だった。



[写真]

P12-14：東京芸術劇場

P15-18：平舘平



音楽で伝えるということ



和田桃子 (フルート／第8期生)

個人レッスン

モーツァルトでもオーケストラ・スタディでも、「もっとダンスのように、自由に、キャラクターを出して」と言われた。リュカが演奏してくれたお手本はまさにその通りで、これまで自分がテンポを守り、ミスをしないうようにとこだわっていた曲のイメージが解体されていくようだった。

リュカが大切にしていたのは「歌う」ことであった。練習をするときはまずフレーズを声に出して「歌う」→それを実際に楽器で「吹く」。これを交互にするというアドバイスを受けた。楽器を手にしたら、決してストレスを感じないようにまずはリラックス。それからとにかく息を吐いて、フレーズを歌ってみる。それからようやく演奏へと移る。あの自然で美しいリュカの演奏は、そこから生まれていたのだと、納得のいくアドバイスだった。

歌うことと同様に、ブレスについても細かく指導を受けた。無意識のうちにブレスをしてしまい、フレーズを損ねてしまっている部分があったことに気がついた。

オーケストラ・スタディ (木管+ホルン)

「フランス風」、「パリ管風」の演奏を学んだ。それぞれが自分のパートに責任を持ち、常にお互いの音を聴くこと。フレーズに対して最適な音量、音色をいつも考えていなければならなかった。テンポやダイナミクスを一人一人が管理し、周りの状況に応じた対応をすること。

リュカの音色は幅広く、「尺八のような音を出して」とよく言われた。すぐに周りと同化させる音色を持つのと同時に、個性のある音色や自分なりのこだわった音色も出せるように研究しようと思った。

室内楽レッスン (木管五重奏)

音楽はコミュニケーションであり、私たちの演奏にはもっと笑いや怒り、愛といった感情の対話が必要だとリュカは言った。また、たとえ伴奏を受け持つ場合でも、常に物語の中のキャラクターのひとりとして演じていなければいけないことを学んだ。

そして自分があまりにp(ピアノ)を小さくしすぎてしまうと、楽器の特性上、オーボエがとでも出しにくくなってしまうこと。同様にホルンやファゴットも含めたこの3つの楽器は、特性上とても難しい楽器だということをいつも意識していなければいけないことも知った。



感想/特別アカデミーを終えて

今回のアカデミーで一番に学んだことは“伝える”ということだ。

リュカはレッスン中、「僕は僕のエネルギーと愛を、全て君に伝えているよ」と言った。私は演奏をする時、どこか様子を伺ってしまっている部分がある。これで良いのか？ミスはしないか？だが大切なことは何をした

いか、何を伝えたいかであり、私が能動的に、自信を持って発することだとわかってきた。

自分が自信をもって発することができたとき、そして先生方が音楽でコミュニケーションを図ろうとするとき、音楽はここまで人の心を動かせるのかと、その想像以上の可能性を感じた。

自分が伝えたいと思えば、自ずと表現や技術はついてくるものなのかもしれない。先生方から頂いたたくさんのアドバイスの愛と演奏の技術を、今度は私が他の誰かに手渡すことができるよう、活動していこうと思った。

アカデミー生レポート ②

C'est de la magie. Comme ça. (それは魔法だよ。こんな風にね。)



大和田璃奈（オーボエ／第8期生）

パリ管弦楽団の奏者によるレッスン、それは想定していたよりもずっと輝きに満ちていて、まさに夢のような日々であった。

個人レッスン

オーボエ奏者レミ・グルイエ氏による個人レッスン。曲目はW.A. モーツァルト／オーボエ協奏曲 K.314。オーボエ奏者にとって重要なレパートリーのうちの1つであり、明るく快活なメロディとハーモニーが美しい名曲である。歌うことが好きな私は、ついロマン派のようなこっとりとした表情になってしまうのが悩みであった。グルイエ氏は一つ一つ丁寧に聴いては提案をし、その場にいる全員でより良いものを作っていく一体感のあるレッスンであった。

オーケストラ・スタディ（木管＋ホルン）

フルート奏者ヴァンサン・リュカ氏とグルイエ氏によるオーケストラスタディのレッスン。チューニングから驚いた。段々音を重ねて、前のグループから音をもらって溶け込んでいく。その通りにやってみると、不思議なことに同じメンバーであるにも関わらず、全く違う音がした。最も印象に残っているのは、リュカ氏の音。息を呑むほど美しい。よく響く大ホールにいるかのような、幸せな空間だ。“神は細部に宿る”。この一言が頭に浮かんだ。あまりのことに一瞬、時空間が歪んだのではないかと錯覚した。その後も彼は Comme ça.(こんな風にね。)と言っては実際に音で表現し、その度に私は息が出来ず、あまりの美しさに胸が苦しかった。

室内楽レッスン（木管五重奏）

最終日の成果発表会を控えて、木管五重奏のグループレッスン。事前に2チームに分かれており、私はリュカ氏のチームに。曲は、《J. イベール／3つの小品》、《P. タファネル／木管五重奏ト短調より第1楽章》、《M. ラヴェル／クーブランの墓》。フルートはもちろん、他の楽器の難しい部分に対して周りはどう対応するか。そこにはお互いを思いやる平和な空間が広がり、良いアンサンブルが生まれることを体感した。演奏だけでなく、アティチュードから学べるのも今回のプログラムの良いところである。

他のレッスンも聴講した。それぞれ共通していたのは、楽器を身体の一部として自然に演奏していたことだ。ショコラのように甘くとろけるようなトロンボーンの色も、フルートのなめらかなシルクのような音色も全て、ただただ美しかった。

翌日、前日の楽曲をさらに深く掘り下げ、よりアンサンブルの深まりを感じた。私たちはすっかりリュカ氏の

ファンになっており、『こんな風にするのはどう?』とニヤリとするのが大好きであった。『どうか遠慮しないで、周りを気にしすぎてストレスに感じないで。心地よく息を吐いて、頭の中で常に歌って。私との約束だよ』そう言ってウインクをしてくれたのは今でも鮮明に思い出すことのできる、記憶の宝物だ。迎えた最終日、講師演奏と成果発表。体力的にもハードなプログラムで、技術面・アンサンブル面全て難易度の高い曲を前に、不安でいっぱいだった。しかし、リュカ氏が嬉しそうに聴いてくれた姿が心から嬉しく、今までにない集中力でお互いを信頼しあえた、とてもいい演奏であった。



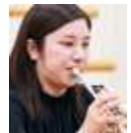
感想/特別アカデミーを終えて

この4日間は技術的な向上以上のことを実感した。それは、異なる文化間の架け橋となる音楽の力、そして音楽家としての自己表現への新たな視点だ。同じ音楽を愛する者として、心から共感できる講師のレッスンほど貴重なものはない。情報過多なこの世の中で日々の悩みも多く、心が追いつけないこともしばしば。しかし、1人ではない。仲間を信頼して共に音楽を奏でられる喜びを分かち合おう。パリ管弦楽団の奏者たちとの出会いは、私にとってかけがえのないものであり、音楽を深く愛する者としてその価値と重要性を改めて認識した。これらの教訓と体験は、私の音楽キャリアにおいて非常に重要なものとなった。確かにそれは魔法のような、充実した4日間であった。

アカデミー生レポート ③

音楽を味わい、楽しむことの大切さ

井上優佳（トランペット／第8期生）



室内楽レッスン（金管五重奏）

初日はセレスタン・ゲラン先生とジョナタン・レイス先生による金管五重奏のレッスンから始まった。まず音色作りのための基礎とハーモニーの練習からスタートした。基礎は、先生が演奏したフレーズを5人でユニゾンで演奏するというものだったが、先生の音色を聴いてその音色を真似できるよう意識していくことでだんだんと5人の音がまとまってきたのを実感した。

この日は、エwaldの《金管五重奏曲第1番》をレッスンしていただいた。

レッスンの中でいただいたアドバイスで特に印象的だったのはアインザッツの方法、ブレスのとり方、皆で目線を合わせるということだ。楽譜に集中するあまり、同じフレーズを吹いている人同士で目を合わせて演奏すること、同じ速度・同じ量のブレスをみんなで共有することなどを忘れがちになっていたが、これらを共有することはアンサンブルにとって最も重要なことであると再認識した。

翌日は、ラフォッスの《金管五重奏曲》をレッスンしていただいた。フランスの作曲家によって書かれたこの作品は、今まで触れてきた作品とは全く違う雰囲気、レッスンを受講する前までは難しさを感じていたが、先生方が「こんな風に」と歌ってくれたり、演奏してくれたりしたことでとても魅力的な曲であることを理解し、大好きなレパートリーの一つとなった。フランスの音楽は色彩感が大事だと教えてくれて、演奏する中で

色々な色、情景のイメージを膨らませることができ、フランス音楽をもっと学びたいと思うきっかけになった。

個人レッスン

今回は受講生全員が同じ曲を選択していたため色々な表現の演奏を聴くことができ、非常に参考になった。

トマジの《トランペット協奏曲》はフランスではとても有名な作品で、よく演奏されていることや、伝統的な演奏方法があることを知ることができた。自分は、なめらかなタンギングをイメージして練習していたのだが、先生はもっと客席の1番奥の人に音がしっかり届き、楽譜上で何をしているかわかるように、はっきりとタンギングをすることをアドバイスしていた。タンギングにも



色々な種類があることを再認識したので、色々なニュアンスのタンギングができるように勉強していきたい。また、身体が力み、常に緊張状態で楽器を演奏しているためバテやすいという点が悩みだったが、個人レッスンでは奏法を一から学ぶことができた。発音する前に口のかたちを作ってしまうこと、息を楽器に流すこと、高音を吹く時に力んでいること等、現在の私の状況について詳しく教えてもらうことができた。まだ感覚が掴みきれていなかったが、脱力していても高音が出るということを体感できた。長年の癖で、一度できてもすぐにまた前の状態に戻ってしまうため根気強く癖を修正していきたい。

楽曲のレッスンだけでなく、基礎練習のレッスンも行ってくれた。基礎練習は、いつも同じものをしていくと慣れてしまうと指摘された。色々なリズムパターンや音の並び方、楽譜に書かれていないニュアンスを付けてみたりして、パターン化するのではなく変化をつけた練習をこれから実践していきたい。

オーケストラ・スタディ（トランペット）

オーケストラ・スタディでは、演奏面だけでなく、作曲の背景も知ることができた。

先生の演奏するオーケストラ・スタディは本当に素晴らしく、ソロで聴いた音色とはまた違った音色を聴くことができて大変感動した。

修了演奏会～アカデミーを終えて

最終日の修了演奏会では、先生方のソロを聴くことができ大変幸せな時間だった。先生方のソロを聞き終わった後は、おひとりおひとりが主役となった長編映画を見た後かのようなだった。音楽とはこういうものだ、演奏を通して教えられた感覚になり、『音楽を味わい、楽しむ』ということの大切さを身体全体で感じることができた。

4日間にも及ぶマスタークラスは初めてだったため、緊張や不安もあったが、毎日が非常に濃く、多くのことを学ぶことができた。フランス音楽に触れる機会はあるものの、どこか苦手意識があったが、最終日にはフランス音楽の魅力に気付くことができた。今まで演奏してきたフランス音楽を今までとは違う目線で演奏してみたいと思う。

このマスタークラスでは、自身のブレスの取り方、そして音色のイメージが変化したように感じる。個人レッスンでアドバイスしてもらったことを思い出しながら、息の使い方をさらに研究していきたい。また、先生方のような音楽との向き合い方ができるようになりたい。

感性を理論で追いかける



亀岡航紀（トロンボーン／第9期生）

室内楽レッスン（金管五重奏）

金管五重奏のレッスンで僕が特に印象に残ったことは「呼吸感の合わせ方」と「アーティキュレーションの明確さ」だ。

まず、先生方は音の出だしに注意を向けていた。5人全員の呼吸感を合わせるのがまず大切であると。呼吸感とは具体的にどんな音量で演奏しようとするのか、テンポはどのぐらいなのか、どのようなテンションで音楽を作るのか、それらを、楽器を吹く直前のブレスで表現することが重要であると先生方は仰られた。加えて、アーティキュレーションの明確さについても言及された。スタッカートはよりソリッドに、スラーはより滑らかに演奏する必要があると。これらは言語の差異から生まれるアーティキュレーションの捉え方の違いであり、特にスラーにおいてはフランス語的なシラブルを用いることで、より効果的に表現できると感じた。

オーケストラ・スタディ

オーケストラ・スタディ（以下、オケスタ）のレッスンはソロとローブラス・セクションの二種類のレッスンが行われた。

日本でも言われることだが、やはりオーディションで吹くオケスタと実際にオーケストラの中で吹くオケスタは違うということを明確に指摘された。特に音量だ。ピアノの音楽はよりピアノに。フォルテの音楽はよりフォルテに。

レイス氏のピアノは、まるで上質な絹を一本一本解いたような繊細さと柔らかさを持っており、非常に感銘を受けた。逆にフォルテは実際に聞こえている音量に比べて身体で感じる音の重量感が1.5倍も重く感じ、これが音の説得力ではないかと考えた。

また、曲ごとの音色の作り方も非常に印象的だった。これまでは音の長さであるとか、テンポ感、アーティキュレーションなどの違いを明確にすることを目標としていたが、それに加え、息の吸い方が重要であると感じた。フォルテの音楽でも予備拍のブレスのスピード感や、身体のどこに息を入れるのか、どのぐらいの量の息を入れるかなどによって、大きく音色が変化することを実感した。それはピアノの音楽でも同様だが、フォルテとは違い、息を吸いすぎないということをレイス氏は以下のように指摘していた。

”身体に息が入りすぎると息が余ってしまい余計なテンションがかかってしまう。むしろすでに身体の中にある息だけで十分にピアノは吹ける”

おそらく今回のアカデミーで最もインスピレーションを受けたのはこのブレス感の捉え方であると思う。



成果発表会～先生方の演奏を聞いて

最終日の成果発表会では先生方の演奏も行われた。

先生方の演奏に共通してみられたことで印象に残ったことがある。それは、フレーズの終結部分、ドミナントからトニックへの移行がとても自然でエレガントであったということだ。

楽典的に言えばドミナントはトニックに向かうためにストレスがかかるから、必然的に音量が少し大きくなり、トニックに入れば少し安定感を得るために音量が少し小さくなるわけだが、先生方はそのような楽典的な意図を感じることなく、全く自然な流れの中でトニックが引き出されている印象を受けた。演奏を聴いていると、「あ、この次はトニックに行くんだな」と直感的に理解することができた。これは当たり前のように当たり前ではないように思う。音程が良い悪いとはまた違った視点で、和声進行がまるで呼吸をするように自然な流れとして実演できる、先生方の繊細な和声感覚は今回学ぶべき大きなポイントであったと感じた。

また、フレーズの最後の音の消える方向が上昇志向であったことも大事なポイントの一つであるように思った。演奏しているホールの空気に溶け込むように消えるのとは少し違い、ほんのり香りを残すような音の切り方をされていて、これこそが「エレガントさ」の表現方法ではないかと感じた。

アカデミー4日間を終えて

この特別アカデミーの4日間は、僕の今後の人生に非常に大きな影響を与えるであろう貴重な時間でした。SNSや教則本を通した二次元的な情報ではなく、演奏者と同じ空間を共有することで得られる感覚的な情報、楽器演奏の核心的な部分を学ぶことができたと思う。

それらは4日間で消化するにはあまりに膨大な情報量であり、実際に演奏に反映させるには数ヶ月、あるいは数年単位で努力する必要があると感じている。

まさに「ローマ（パリ）は一日にして成らず」

引き続き研鑽を積んでいきたい。

REPORT BY
ACADEMY
STUDENT

講師からのフィードバック



ヴァンサン・リュカ（フルート）

アカデミー生たちの演奏にどのような印象を持ちましたか？

受講生たちのレベルは非常に高く、プロオーケストラのオーディションに必要なレベルに達しつつありました。指導が予定されていた曲目は膨大な量でしたが、すべてよく準備されており、個々の努力の跡がはっきりと見られました。受講生たちの、集中して耳を傾け、講師をよく観察する姿勢は、特にアンサンブルの指導に素晴らしい効果をもたらしたと思います。

4日間を通じて、アカデミー生にはどのような変化が見られましたか？

アドバイスや指導に対する適応力が素晴らしく、4日間の進化も素晴らしかった。アンサンブルについては、仲間の音を聴くこと、チューニング、音色、音楽の色彩の面でかなりの進歩が見られました。

特別アカデミーでの経験はどのようなものでしたか？

この素晴らしいプロジェクトを成立させた要素は多くありますが、なかでも、東京芸術劇場の効率的できめ細かな制作チームは、さまざまなスケジュール変更に対応し、アカデミー生が快適に受講できるようにしてくれました。

今後、木管楽器の各パートの人数を増やし、入れ替え制にしてはどうでしょうか。アンサンブルの曲目はこれからも重視すべきだと思います。アカデミー生全員に歌のレッスンを取り入れることを強く勧めます。

わたしはレッスンで、近い将来、世界的にクラシック音楽の質が下がっていくのではないかという漠然とした懸念に触れました。一方、最近日本ではマスタークラスの質がどんどん高くなっていますので、芸劇アカデミーのよい将来が開けるよう願っています。



レミ・グルイエ（オーボエ）

アカデミー生たちの演奏にどのような印象を持ちましたか？

受講生はみな音楽的・器乐的才能をバランスよく発揮し、素晴らしいチームワークで非常にレベルの高いアンサンブルを披露してくれました。特に室内楽ではアカデミー生の吸収力の高さに感心させられました。新しい学びを活かして、レッスンの最後には素晴らしい音楽的な実りを聴かせてくれました。

4日間を通じて、アカデミー生にはどのような変化が見られましたか？

最初のレッスンで、ダイナミクス、音色、(ソロなのか、伴奏なのかという)役割の理解に取り組む必要性があると判断しました。この4日間で、より良いバランス、アンサンブルにおける各々の「居場所」の確認、そして音楽的なコミュニケーションが大きく発展したと思います。これによってアカデミー生たちは自由や個性を付加する余地を見つけ、作品をより感情的に活き活きとさせることができました。コントラストやアーティキュレーションについて取り組むことで、音楽的な色彩感や繊細さが日に日に増していき、とても良い結果が得られました。

非常に積極的に受講してくれたオーボエの生徒2人に感謝したいと思います。2人ともすぐに提案を取り入れてくれたので、早くレッスンを進めることができ、多くの点をカバーすることができました。(個人レッスンは3時間1回ではなく、2時間のレッスンを1回、次に個人レッスンがない日、その後2回目のレッスンというスケジュールにしても良いかもしれません)。

ファゴットのレッスンも楽しみました。アカデミー生はわたしの音楽的な提案に対して非常にオープンでした。レッスンを通じて、アカデミー生たちは自分の演奏を以前より主張しつつ、同時に仲間の音楽に対してより繊細に気を配り、反応できるようになりました。視覚的なコミュニケーションも改善しました。個人的にもチームとしても、より音楽を楽しめるようになったと思います。

特別アカデミーでの経験はどのようなものでしたか？

アカデミーは非常に濃密でした。長時間にわたるレッスンで、伝えたい情報量が非常に多かったためです(通訳の皆さんが大変素晴らしく、仕事を大いに助けてくれました)。受講生たちが非常に熱心だったのでとても楽しく感じましたが、例えば半分の長さを2日に分けて行った方がよいかも知れません。

日本文化におけるクラシック音楽の位置づけやアプローチについて知ることができたのは、特に充実した経験でした。今回、フランスで音楽がどう教えられているか伝えるというささやかな役目を果たすべく来日しましたが、私自身も多くのことを学ぶことができ、将来有望な素晴らしい音楽家たちにも出会うことができました！



セレスタン・ゲラン (トランペット)

アカデミー生たちの演奏にどのような印象を持ちましたか？

レベルは非常に高く、チームワークが素晴らしかった。わたしはレッスン中、音楽的な面でもそれ以外でも「グループ意識」の重要性に度々触れましたが、アカデミー生がそれを尊重してくれたことがよく分かりました。彼女たちは演奏中に互いをよく聴くことができたので、一緒に仕事をするのが楽しく、実り豊かなレッスンになりました。彼女たち集中力と献身的な姿勢はヨーロッパのレッスン現場では見られないもので、私たち講師が深く取り組むのを助けてくれました。感謝しています。

優れたチームワークを補完するために、室内楽やオーケストラ作品でのソロにおける表現力や自信をつけることをお勧めします。

4日間を通じて、アカデミー生にはどのような変化が見られましたか？

アカデミー生たちは皆、(講習期間としては比較的短い)4日間で確かな進歩を遂げ、良い方向へとはっきり変化していました。特に、オーケストラ奏者になるために必要不可欠なオーケストラ・スタディで進歩が著しかったと思います。より多くの学生がこのようなレッスンの機会を得られるようになることを望みます。

特別アカデミーでの経験はどのようなものでしたか？

このアカデミーに参加できたことをとても嬉しく思いますし、パリ管弦楽団講師陣の一員として素晴らしい招待に参加できたことを本当に感謝しています。運営や待遇(滞在先、スケジュール、東京芸術劇場のスタッフ、通訳)も素晴らしく、4日間をアカデミー生と指導陣の双方にとってできる限り価値あるものにするために大いに役立ちました。金管楽器の学生たちに、特にオーケストラで役立つ技術を伝えられたことを願っています。彼らの将来に必ずや役に立つことでしょう。



ジョナタン・レイス (トロンボーン)

アカデミー生たちの演奏にどのような印象を持ちましたか？

アカデミー生たちのグローバルなレベルには本当に感心しました。特に抑揚やアンサンブル力に関して。彼らがより向上できる点は、楽譜を脇に置いてもっと楽しむことだと思います。

4日間を通じて、アカデミー生にはどのような変化が見られましたか？

変化は大きなものでした！初日は恥ずかしがってほとんど何も質問されなかったのですが、最終日にはたくさんのお話をシェアすることができました。また、私たちの指導内容に配慮してくれたのか、彼らの演奏にも大きな変化を感じました。

特別アカデミーでの経験はどのようなものでしたか？

日本で教えるのは初めてでしたが、とても素晴らしい経験でした。好奇心旺盛な受講生たちは私が話すことすべてを心から尊重して聴いてくれました。この4日間、音楽を共有するのみならず、人間的な交流の素晴らしい瞬間を経験できたことを本当に嬉しく思います。

プロジェクトを通して

パリ管弦楽団／フィルハーモニー・ド・パリ
教育・アウトリーチ マネージャー ラシェル・デール

Rachel Dale
Education and Outreach manager - Orchestre de Paris - Philharmonie de Paris



このプロジェクトを実施するプロセスは創発的で興味深いものでした。東京芸術劇場とパリ管弦楽団がコラボレーションに意欲的であったおかげで、それぞれのマネジメントを納得させるために適切な枠組みを見出すことができました。両者はできる限りのことを実現しようとそれぞれ力を尽くしました。

この特別アカデミーは芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド（GOA）にとってもパリ管弦楽団にとっても革新的なものでした。同団が公式に行う初めての国際指導プロジェクトであったため、指導料やスケジュール、曲目、渡航・滞手段やビザの手配など、長期にわたって多くのやりとりが必要でした。交渉中には指導料の値上げという難しい内容も検討しなくてはなりませんでした。私たちの交流はいつも非常に前向きであったことに感銘を受けました。

時間割は素晴らしくアレンジされていましたが、講師陣は音楽的、芸術的な理由からしばしば変更をリクエストしました。東京芸術劇場の制作チームは理解と柔軟な対応を行ってくれ、講師陣から非常に感謝されていました。

アカデミー生はレベルが高く、熱意があり、素晴らしく準備をしていたと思います。私も GOA のプロジェクトをよりよく理解することができました。講師達は特にフランス音楽の曲目について実践的な新しいアプローチ方法を伝えましたが、それに応えたアカデミー生たちの演奏に私たちは大変感銘を受けました。

過去に日本でマスタークラスを指導した経験のある講師もいましたが、より長い時間を教える機会に恵まれたことは、やりがいのあることでした。初日から最終日までの進歩は(わずか4日間にもかかわらず)アカデミー生と講師の双方にとって、非常に前向きで実りあるものでした。アカデミー期間の全体を通じて、良い進歩が顕著に見られました。

講師にとってレッスンにおける文化の違いを体験するのは興味深いことでした。ヨーロッパではレッスン中にかなり言葉でのやり取り（質問と回答）をします。こうすることで、生徒は指導の内容を確実に理解することができるからです。日本ではあまりこういうことは無いようで、講師は普段より多く話す必要があり、これもまた新しい経験になりました。

GOA のオリジナリティは、東京芸術劇場の使命、つまり地域社会に溶け込むことの重要性を反映しています。それは（訳注：繁華街の中心にあるという）立地にも関係していると思います。「スタート地点に立つ若い音楽家が、日本の職業音楽家として生きていくために必要なわざを身につける」という本アカデミーの目的を踏まえて、講師陣は大量のオーケストラ・スタディを指定しましたが、受講生たちの準備の良さに感銘を受けていました。

閉会式で話した2人のアカデミー生、亀岡航紀さんと大和田璃奈さんからのフィードバックはとても興味深いものでした。大量の課題は、音楽的性格も様々に異なっていたため、特に濃密だった冒頭2日間で強い心理的プレッシャーを感じていたというのです。レッスン中、講師達は安心感を与え、建設的なアドバイスをするために、できるだけ緊張をほぐすよう努めました。レッスンはこれまであまり知らなかったレパートリーの解釈を見つけ、音楽的な対応力を伸ばす機会でもあります。しかしそれがプレッシャーやストレスの源になる可能性も講師陣は認識していたため、アカデミー生になるべくストレスを感じさせないよう努めていました。

特別アカデミーのレッスンを通じて、講師からは以下のような様々なアドバイスがありました。

- ・アンサンブルやオーケストラ演奏では、他の奏者の音を注意深く聴く必要があること。周囲を包むサウンドに耳を澄まし、自分を調節し、溶け込むこと。
- ・フレーズ全体を尊重すること - 常に音楽的なベクトルを持って終わりへと向かうこと。
- ・旋律は聴き手に語りかける道具だと考えること（物語を話すように）。
- ・一緒に演奏している人たちをよく聴き、そのサウンドに溶け込むこと（訳注：記譜された）音量の指定には細心の注意を払うこと
- ・演奏中の身体は柔軟で自由であること。
- ・ステージリハーサル後は本番まで演奏しないこと（休憩時間の重要性）。

各レッスンでは、膨大な量の技術的なアドバイスが個別に与えられ、特にフランスの管楽器の伝統における解釈の特殊性について話されていました。アカデミー生たちは驚くほど反応がよかったので、それぞれの演奏や解釈に基づいて指導された技術的・音楽的なアドバイスを必ずや活かすことができるでしょう。

東京芸術劇場とフィルハーモニー・ド・パリの将来的なコラボレーションを視野に入れつつ、演奏、教育、事業企画の観点から東京と日本の音楽状況を理解し始められたのは大変素晴らしいことでした。東京芸術劇場の上層部や事業第一係（音楽制作）との長いミーティングは非常に有意義かつ創発的で、前向きなものだったと思います。

東京芸術劇場とフィルハーモニー・ド・パリには、さまざまな面で共通点が見出されました。劇場の立地条件や、芸術的制作における先進性、国内外の様々な芸術分野による演目を劇場だけでなく周辺のパフォーマンス・スペースで上演していることなどです。また両劇場は、若者が聴衆として、あるいは将来的な音楽の担い手として、重要なアプローチ対象であると考えています。特別アカデミーの間さまざまな議論が交わされましたが、今後日本は少子高齢化によって、音楽公演の制作環境が厳しくなることや、教育機関の競争の激化が予想されるという話題は特に興味深いものでした。

私は最大の喜びをもって、プロジェクトの報告書とともに、今後の交流事業のアイデアをパリ管弦楽団およびフィルハーモニー・ド・パリのマネジメント層に提案しようとしています。長期的な視野で国際的な文化関係を構築することを目指して、次のステップでもその一端を担えるよう願っています。



フィルハーモニー・ド・パリとの連携を通して

事業企画課 事業第一係

山下直弥

フィルハーモニー・ド・パリ(以下、PP)との交流は東京芸術劇場にとって大変意義のあるものでした。PPは公共劇場として、音楽と社会を連結していくために、以下のような理念を持っており、それを根幹とした多種多様な事業が展開されています。

- ・人々にとって最上の音楽を提供すること
- ・音楽がある特定の集団のためのものではなく、全ての人々のものであること
- ・様々な音楽ジャンルの間に存在するヒエラルキーをなくすこと
- ・ローカルとインターナショナルを結びつけ、様々な文化をつなげる
- ・音楽を聴くこと、音楽を行うこと、音楽を理解することを連結させること
- ・モダンティについて重要視し、創作、初演、新しい企画を人々の生活の一部として捉えようとする

予算や地域性が異なるため、実施できる事業も異なりますが、これらのミッションとスピリットは我々にとっても大変刺激的なものであり、今後の我々の事業展開に大変参考になるものです。今まで東京芸術劇場における海外の劇場とのつながりは主に共同制作などの一時的なつながりであり、公共劇場の事業の裏にある理念の交換や精神的なつながりではありませんでした。コンサート／パフォーマンス部門の前ディレクターエマニュエル・オンドレ氏もそういった一時的な関係を求めておらず、深い精神的なつながりを求めています。

今回、パリ管弦楽団の教育・エデュケーション担当のラシェル・デーブルさんとは、「特別アカデミー」実施までの準備過程の中で、様々な側面について議論することができ、大変意義深い時間となりました。今後もお互いの劇場の理念や精神性について議論し、事業が展開できるよう、継続的な関係を築いていきたいです。

特別アカデミーを通して

事業企画課事業第一係

芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド 事業担当

三浦幸恵

当アカデミーは、2014年にプロの吹奏楽団体とタッグを組み、若手管打楽器奏者の育成と吹奏楽曲の開拓を目的に事業が開始されました。時を経て、吹奏楽だけに限らず、オーケストラや室内楽にも視野を広げ、幅広くこの日本のクラシック業界で活躍する人材を育てるアカデミーに進化を続けています。10年目を迎える年に、このような特別アカデミーを開催できたことは大変幸運なことでした。

特に2020年以降、本来であれば様々なレッスンや本番からたくさんのお話を吸収する年代に、人前で演奏する経験や仲間と音楽づくりに励む室内楽、目標となる世界で活躍する奏者から学ぶ機会が劇的に減り、若い奏者にとっては苦しい時間を過ごしていたように思います。この特別アカデミーが実現したことで、多くのアカデミー生にとって、目指している音楽を体現する奏者と出会い、そしてその奏者と音楽と言葉を通じて生身の交流ができたことは何にも代えがたい音楽体験となりました。また、次の一歩として世界へと目を向け、視野を広く持つきっかけにもなったことでしょう。

最後に、今回招聘したバリ管のみなさまが、アカデミー生を尊重し、彼ら／彼女らの秘めた力を引き出してくださったことに改めて感謝申し上げます。参加したアカデミー生は、この特別アカデミーで感じたこと、学んだことを各現場で活かし、そして、各々が希望するキャリアを築いていく過程で今回出会った講師のみなさまのように音楽の魅力を伝えてゆく立場となることを期待したいです。

東京芸術劇場×フィルハーモニー・ド・パリ パリ管弦楽団メンバーによる特別アカデミー

主催	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
写真	平舘平
デザイン	伊川絵理
翻訳	鉢村優 ※フィルハーモニー・ド・パリ、パリ管弦楽団メンバーたちのコメント
編集	東京芸術劇場
企画・発行	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 〒171-0021 東京都豊島区西池袋 1-8-1 03-5391-2111（代表）
発行日	2024年3月1日

東京芸術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre

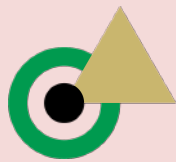


PHILHARMONIE DE PARIS
ORCHESTRE
DE PARIS

©Tokyo Metropolitan Theatre 2024

Printed in Japan

無断転載禁止



**GEIGEKI
ORCHESTRA
ACADEMY**